



2015年9月20日発行

立野ダムによらない自然と生活を守る会 代表 中島康 熊本市西区島崎4丁目5-13

検証・鬼怒川の堤防決壊 立野ダムより河川改修を！



熊本日日新聞 9月11日夕刊

堤防が決壊すると凄まじい被害をもたらすことを、今回の鬼怒川の堤防決壊の報道で目の当たりにしました。鬼怒川の上流には4つの大きなダムがありながら、堤防決壊を防ぐことはできませんでした。ダムは満水になると、ダムに流入する洪水をそのまま下流に流すことになり、洪水調節を果たせなくなります。

国土交通省の資料によると、鬼怒川上流の4つのダムの洪水調節容量は、湯西川ダム 3000 万^m³、五十里ダム 3480 万^m³、川俣ダム 2450 万^m³、川治ダム 3600 万^m³、合計で 12530 万^m³です。計画中の立野ダムの洪水調節容量は 940 万^m³であり、鬼怒川上流の4つのダム群は、立野ダム 13 個分の洪水調節容量がありながら、ダムが国交省の主張するように洪水を調節するために機能したとしても、結局堤防決壊を防げなかった、ということになります。

驚くのが、堤防が決壊した鬼怒川は、10年に一度起きると想定される洪水に対応できない堤防だったことです。ダムがあるために、堤防工事が後回しになった典型といえるのではないのでしょうか。

3年前の九州北部豪雨の時、もう少しであふれるところまで増水した熊本市中心部の白川の右岸（大甲橋から長六橋の区間）をはじめ、大きな被害を受けた龍田地区や阿蘇市、改修がほとんど進んでいなかった未改修区間でも、白川流域では河川改修工事が急ピッチで進められています。しかし、熊本市黒髪の小碓橋から上流の熊本県区間の河川改修はこれからであり、大津町、菊陽町の白川中流域では、河川整備計画すら未策定です。917 億円（平成 24 年度時点）もかかる立野ダム建設ではなく、河川改修をさらに進めるべきです。

そこで、9月29日に、鬼怒川の堤防決壊現場を歩いて取材された、ジャーナリストのまさのあつこさんをお招きし、緊急報告集会を開きます。鬼怒川の堤防決壊を検証し、白川の安全と立野ダムについて考えます。皆様方のご参加をお待ちしています。

●立野ダムをめぐる動き 2015年7月～8月

- 7月5日 ストップ立野ダム署名活動（熊本市下通り）
- 7月8日 熊本市長宛の要望書提出 高田副市長が対応 13名参加
- 7月12日 シンポジウム「河川改修と立野ダムの必要性は」熊本市パレオ 130名参加
- 7月22日 国交省開示データ分析「河川改修で立野ダム不要」立野ダム計画撤回を熊本市、熊本県に要請書を提出。熊本県庁にて記者会見
- 7月25日 南阿蘇村で立野ダム問題学習会 白水庁舎 40名参加
- 8月29日 立野ダム問題学習会 熊本市託麻公民館 20名参加

国交省開示データ分析「河川改修で不要」立野ダム計画撤回を要請



熊本市長宛に要請書を提出2015.7.22

国土交通省が情報開示した白川の「現況河道流下能力算定表」によると、2012年の九州北部豪雨以降に行われた河川改修で、白川の流下能力は大幅に向上し、国管理区間では立野ダムがなくてもあふれない川づくりができていくことが明らかになりました。

そのことを受けて7月22日、熊本市と県に立野ダムの白紙撤回を国に働きかけることを求める要請書を提出しました。提出後、熊本県庁で記者会見を行いました。以下、その概要をお知らせします。

●国交省が情報開示したデータで明らかになったこと

国土交通省は、白川の「現況河道流下能力算定表」を情報開示しました。この資料によると、平成24年7月12日の九州北部豪雨は、最大流量毎秒2300トンであったため、平成24年7月12日当時、流下能力が毎秒2300トン未満の多くの地点で、堤防からあふれるか、危うくあふれそうになりました。

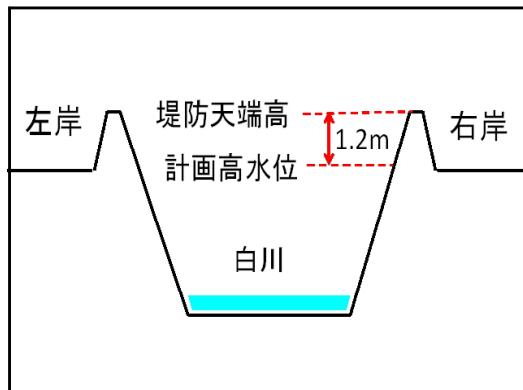
ところが、改修後（平成27年3月測量時点）の資料によると、改修が行われた地点では大幅に流下能力が向上しています。藤崎宮地点を例に挙げると、毎秒1748トンだったのが、毎秒3630トンと、流下能力が倍以上に向上しています。

平成27年3月測量時点で改修が完成していない4地点を除くと、全ての地点で白川の堤防上端の高さでの流下能力は、河川整備計画の目標流量（毎秒2300トン）を上回っています。このことにより国管理区間（河口から小碓橋まで）では、立野ダム（洪水調節能力 毎秒200トン）がなくても、改修が完成すれば平成24年7月12日の九州北部豪雨（毎秒2300トン）が堤防からあふれずに流れることが明らかになりました。



改修で流下能力が2倍以上に増えた
藤崎宮地点 2015.5.20撮影

また、河川整備基本方針で定められた、白川での 150 年に一度の計画高水流量（毎秒 3000 トン）を上回る地点は、178 地点中、154 地点（86.5 %）にのぼり、他の地点も大半がその値に迫る流下能力があることが明らかになりました。



計画高水位と堤防天端高

計画高水位（堤防天端から 1.2 m 下）での流下能力を見ると、目標流量を下回る地点は 89 地点中、7 地点あります。しかし、最も流下能力の低い地点でも計画高水位を約 20cm 上回るだけであり、堤防天端から約 1m の余裕があります。河道にたまった土砂を撤去すれば十分対応可能な数値です。

以上述べた通り、国土交通省が情報開示したデータによると、河川改修で白川の流下能力は大幅に向上し、立野ダム建設は不要であることは明らかです。

※開示されたデータや、当会が国交省などに提出した文書は、当会ホームページで見ることができます。

石川県の穴あきダム（辰巳ダム）を現地視察しました

8月24日、石川県の辰巳ダムを現地調査しました。昨年の浅川ダム（長野県）、益田川ダム（島根県）に続く、穴あきダムの現地調査です。辰巳ダムは、金沢市の兼六園に水を引く辰巳用水に影響を及ぼすということで反対運動が起きていたのは知っていましたが、2012年に竣工していたとは知りませんでした。

辰巳ダムの高さは47m（立野ダムの約半分）で、洪水調節量は580万 m^3 。ダムの下部に幅2.9m×高さ2.9mの穴が2つ、同じ高さに並んでいます。ダムのやや上部に幅4.5m×高さ4.5mの穴が1つ、さらに最上部には非常放水用の大きな穴が6つ開いています。穴の上流側は、やはり20cmのすき間のスクリーンで覆われていました。

辰巳ダムの上流には、2つの既存のダム（犀川ダムと上寺津ダム）がありました。つまり、洪水時に流れる流木や土砂などのほとんどが既存のダムでカットされ、辰巳ダムには流れ込まないわけです。

一方、立野ダムの場合は、洪水時、阿蘇カルデラ内の全ての流木や岩石、火山灰（ヨナ）などが立野ダム地点に集中します。洪水時に流木などで立野ダムの穴がふさがり、洪水調節できなくなるのは明らかです。



上流側から見た辰巳ダム本体 2015.8.24撮影



穴の上流部はスクリーンで覆われている

白川大水害3周年シンポジウム 今本博健名誉教授が講演



白川大水害3周年シンポジウム 2015.7.12

白川大水害3周年シンポジウム「河川改修と立野ダムの必要性は？～豊かで安全な白川を未来に手渡そう」を、7月12日に県民交流館パレア（熊本市）で開催しました。約130名の参加者で、会場はほぼ満席でした。

立野ダム問題の現状報告のあと、京都大学の今本博健名誉教授（河川工学）が、「国土交通省が情報開示した資料を見ると、国管理区間では現在行われている河川改修で、立野ダムなしで十分な流下能力がある。国土交通省がなぜこのような資料を情報開示したのか、驚いている。河道改修をさらに進め、白川の流下能力を高めるべきだ」と、立野ダムによらない治水対策を訴えました。

南阿蘇村で立野ダム問題学習会

7月25日、南阿蘇村白水で立野ダム問題の学習会を開きました。約40名の参加者のうち、33名が地元からの参加でした。

立野ダムの問題点や工事の状況などの説明のあと、12名の参加者から次々に質問や意見が出され、1時間を超える活発な討論ができました。

南阿蘇村のこれまでの経過や、すばらしい阿蘇の自然が壊されそうになっていることへの心配。ジオパークとしても貴重な場所であること、

ダムがこのままであれば4年ごとの再審査で世界ジオパークの認定を取り消される恐れが大きいこと。下流にとっても南阿蘇にとっても全くメリットがないダムであること。世界の阿蘇を守るために日本全体に訴えかける必要があるなど、積極的な意見交換ができました。



立野ダム問題学習会(南阿蘇村白水) 2015.7.25

編集後記 新国立競技場の建設計画が「白紙」となりましたが、誰も責任をとらない無責任体質が問題になっています。国は東京都に500億円出すように頼んでいたそうですが、立野ダムの事業費は平成24年度時点で917億円。熊本県の負担はその3割、275億円にもなることは、ほとんど知られていません。立野ダム建設に対する不安や質問を国土交通省に投げかけても、担当者は「上司に伝える」と繰り返すばかりです。熊本市や県は「国の事業だから地元はなかなか関与できない」といいます。国土交通省は、何度要望しても立野ダムの説明会を一度も開いたことはありません。公共事業は本来、住民の税金で、住民のために行われるべきものです。にもかかわらず、住民に説明責任も果たさず、責任の所在さえ分からない事業は「公共事業」とは呼べません。今後のイベントにぜひご参加ください。(N.O.)